

---

# Fellowship's Miscellany

---



## 海外研修を終えて Research Leave in Leicester

市川 千恵子

Chieko ICHIKAWA



2009年9月1日より1年間、レスター大学ヴィクトリア朝文化研究センターにて、客員研究員として研修の機会をいただいた。レスターはロンドンから急行で1時間20分ほどの小さな都市である。ちなみにトマス・クックの誕生の地でもあり、駅を出てすぐのバス停のそばに彼の銅像が置かれている。また、New Walk という19世紀から続く遊歩道は緑も多い心地よい空間で、市民の憩いの場となっている。幸いにも、私は大学へも駅へもアクセスのよい Upper New Walk にフラットをみつけることができた。

レスター大学を研修先に選んだきっかけは、2008年9月に同大学が開催校となった British Association

for Victorian Studies (BAVS) の第9回年次大会 (Victorian Feeling: Touch, Bodies, Emotion) にて、“Body Politics of Their Own: The Crusade of Josephine Butler” と題した研究発表をした際に、当時ヴィクトリア朝文化研究センターの Director であった Joanne Shattock 教授に司会をしていただいたことであった。その後、招聘の話



は順調に進み、渡英後も Shattock 先生の計らいで、研究室を用意していただいたり、若手の先生方との交流の機会も数多く設けていただいたり、スタッフの一人としてホームページまで作っていただくなど、刺激のかつ有意義な研究生活のための環境が整えられた。しかしながら、問題は大学附属図書館の蔵書にあった。一次文献、二次文献ともに不足気味であることは、渡英前からある程度認識していたため、空港便で文献を数箱送ったものの限界があり、私の研究テーマ（19世紀末のフェミニズムと女性の著述家）に沿う文献を参照するために、隔週でロンドンへでかけることになった。ロンドンでは大英図書館、Women's Library、Welcome

Library、そして、ときには Salvation Army Archive などへ足を運び、さらにはエディンバラの National Library of Scotland、University of Edinburgh Library など、実に多くの図書館で作業をすることになってしまった。だが、これだけ多くの図書館で文献の閲覧をし、資料を収集することができたのも、研修の機会をいただけたからに他ならない。では、次に在英中に参加した学会やセミナーなどについて報告させていただく。

各地で開かれる学会やセミナーに積極的に参加して気付いたことは、研究の傾向がきわめてマイナーな作家の掘り起こしにあることであった。しかし、そのような動向のなかでも、ディケンズは別格のようだ。例えば、Victorian Popular Fiction Association は英文学のカノンから外れた当時の人気作家研究を目的として2009年9月に発足したが、渡英後間もなく出席した第一回大会では、ブロンテ、ギャスケル、G・エリオット、ハーディについての発表は皆無であったにもかかわらず、ディケンズのパネルがあったのだ。いかにディケンズの位置が特別であるかを再認識した。また、10月10日にはロンドン大学の Birkbeck College 主催による Dickens Day (2009年度のテーマは Dickens and Science) があり、ディケンズの作品で学位論文に取り組んでいる中国人留学生と一緒に参加した。近年の学際的な文学研究のなかでも、Gillian



Beer 著 *Darwin's Plots* (1983) の出版以降、とくに文学と科学の関係は磁力をもつ研究領域のひとつである。様々な角度からディケンズとヴィクトリア朝の科学を検証した発表のなかで、出色と思われたのは1人目の Plenary speaker であった Gowan Dawson (Senior Lecturer, University of Leicester) による “Richard Owen, Comparatives Anatomy and the Reading of Dickens's Serial Fiction” であった。解剖学者であり、自然科学博物館の創設者でもある Richard Owen の日記、手紙、論文におけるディケンズへの言及を丹念に読み込んだ上で、19世紀を代表する作家と科学者の友情関係から生じた互いの仕事への影響を検証し、ディケンズの科学への姿勢、さらにオーウェンのディケンズ作品への傾倒を浮き彫りにする刺激的な内容であった。なお、この日の研究発表に基づく数本の論文は、Birkbeck が発行する *19: Interdisciplinary Studies in the Long Nineteenth Century* 10 (2010) (web journal, URL: [www.19.bbk.ac.uk](http://www.19.bbk.ac.uk)) に掲載されているので、参照されたい。

レスター大学ヴィクトリア朝文化研究センターでは11月にマイケル・スレイター先生の講演が催された。出版されたばかりの伝記を中心に、ユーモアにあふれた軽妙な語り口で、聴衆を魅了された。同時にその内容に大いに啓発された。まずディケンズの伝記のなかで優れているのは、

John Forster の *Life of Charles Dickens* (1872-74), Edger Johnson の *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (1953), Peter Ackroyd による *Dickens* (1990) の三作と指摘されたうえで、そうした著書との差異化を図るために、ご自身の著作 *Charles Dickens* (Yale University Press, 2009) は作家としてのディケンズに焦点を当てたことのであった。当然そのなかには出版社との関係や、編集者としての他の作家との関係、さらに読者との関係といった大きなテーマが含まれ、あのような詳細かつ緻密な大著となったのであろう。講演の後で、ディナーをご一緒したところ、かつて京都大学で客員教授をされた際の思い出や、佐々木徹先生への厚い信頼、宮丸裕二先生との友情、さらに原英一先生をはじめとした日本のディケンズ研究者への関心など、日本の話題に尽きなかった。初対面の私に対して非常に好意的であったのも、日本支部の会員の皆様がこれまで育まれた友情関係のおかげだと感謝を申し上げたい。

また、同センターでは1月の中旬から3月の下旬にかけてセミナーが隔週で開かれる。2010年は、5回のセミナーのうち、2回がディケンズを中心テーマとしていた。とりわけセミナーの第1回を飾った Juliet John (Reader, University of Liverpool) の “Dickens and Mass Culture” は、ディケンズが積極的に取り組んだ public

reading/public speech を検証し、19 世紀の作家としては稀有とも言えるディケンズと聴衆との密接な関係を考察し、さらにはディケンズ・ワールドのようなヴィクトリア朝文化の heritage industry へと話題が広がりながらも、Englishness の継承という national identity の問題をも考えさせる、非常に興味深い内容であった。実のところ、この他にも過去に関連した内容で彼女の講演を聞く機会が2度あり、私の知る限り、彼女はこのテーマに数年取り組まれているようだ。なお、間もなく Oxford University Press より *Dickens and Mass Culture* の

タイトルにて単著が出版される予定である。

19 世紀のジェンダー研究をリードしてきた Cora Kaplan (Honorary Professor, Queen Mary College, University of London) による“Charles, Charles and Neo Victorian Novels”というセミナーに参加した際にも、同様に business of legacy という問題を提起されていた。ディケンズ作品の映像化、舞台化に加え、ネオ・ヴィクトリアン小説という新たなジャンルにおけるディケンズ文学の再構築という点を考慮にいと、イギリス文化のなかのいたるところにディ



ケンズが潜在しているという指摘は刺激的であった。ちなみに当日数あるネオ・ヴィクトリアン小説のなかで言及されたのは、『大いなる遺産』からの影響が大きいとみなされている Peter Carey の *Jack Maggs* (1998) や Lloyd Jones の *Mister Pip* (2006) などである。すでにディケンズの作品世界は様々な角度から照射されており、新たな方向性を見つけるのは容易ではないようにも思えるが、ヴィクトリア朝作品の映像化研究や、ネオ・ヴィクトリアン小説研究のなかにも、何らかの糸口が見いだせるのではないかと感じている。

ディケンズ研究とは離れるが、6月末にロンドンで開かれた Women Writers in Fin de Siècle International Conference にて、“The Portrait of a Medical Student as a Young Woman: Margaret Todd’s *Mona Maclean*” と題し、現在の研究テーマである世紀末のフェミニズムと女性医師の著作に関する研究発表を行うことができた。渡英直後に CFP を発見し、この国際学会で発表することは一つの目標であった。また、新しい研究プロジェ

クトをある程度形にすることができたのも幸いであった。この学会では〈新しい女〉研究が新たな局面を迎え、さらなるマイナー作家の発掘や希少文献のリプリント版の出版の動きが盛んであることを垣間見て、大いに刺激をもらった。

最後に英国の研究環境について書き添えておこう。英国でも若手研究者の就職状況は非常にきびしく、学位取得後も研究者としての専任職に着くことができるのはごくごくわずかであると聞いた。だが、就職した者にとっては、その後の研究業績に対する期待や評価が常にプレッシャーであるようだ。6年間で少なくとも論文を3本、単著を1冊というノルマが与えられる大学もあると耳にした。文学研究ではかなり厳しい数字という印象をもつのは私だけではないであろう。この1年間の研究成果を早急に形にすることは難しいが、イギリスの文学研究者の出版に対する積極的な姿勢を見習いつつ、自分なりのペースで発信していきたいと考えている。